滋賀・安土城（あづちじょう）跡

1　所在地　滋賀県蒲生郡安土町下豊浦・神崎郡能登川町南須田

2　調査期間　一九九九年（平11）一月～三月

3　発掘機関　滋賀県教育委員会（滋賀県安土城郭調査研究所）

4　調査担当者　岩橋隆浩

5　遺跡の種類　城郭跡

6　遺跡の年代　一六世紀末（一五七六年～一五八五年）

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

（近江八幡）

安土城は、織田信長が天下統一の拠点とするために築いた城として著名である。その特徴は、高石垣によって構築された郭群、瓦葺建物の採用などで、この後に続く近世城郭の規範となり、与えた影響は非常に大きい。築城は天正四年（一五七六）に開始され、天正七年には天主が完成したが、天正一〇年の本能寺の変の直後に、天主・本丸・二の丸などの主郭部のみ焼失したことが、これまでの調査でわかっている。その後、天正一三年（一五八五）に豊臣秀次が近江八幡に八幡山城を築くまでは、城は引き続き機能していたと推測されている。

今回安土城で初めて木簡が出土したのは搦手道最下部で、安土山の東山裾部にあたる。安土城の搦手道は、安土山山頂部一帯にある主郭部の北虎口から東へと下り、後述のように直接湖面に通じている。『近江国蒲生郡安土古城図』には「台所道」の記載があり、また湖面に近い部分の道の北側には「蔵屋敷」と記されている場所がある。これまでの発掘調査で、搦手道の下半部は他の城内道のような石段ではなくスロープ状になっていることや、蔵屋敷へもスロープ状の通路を通って入ることが判明している。このことから搦手道は、城内への物資搬入路としての性格が考えられてきた。今回の調査で搦手道の最下部は浅い入り江状になることがわかったが、木簡はこの入り江の中にある航路状遺構の埋土の上層から一点出土した。航路状遺構は幅約三・五m深さ約一・六mを測る素掘りの溝で、埋土中には木簡の他に多数の木製品や植物遺存体などが含まれていた。また多量の瓦片がこれらの遺物とともに出土したことから、廃城後に城内が荒廃した結果、木簡を含む多数の遺物が、城内より当遺構内に流れ込んできたものと考えられる。なおこの遺構からは、安土城時代のものよりも新しい遺物は一切出土していない。

8　木簡の釈文・内容

(1)　・「二斗五升　又三郎
　　六郎兵へ」
　　・「卯月十日　本郷　」　150×22×4　011

頭部を台形状に整形しており、先端部に向かって幅は徐々に細くなる。厚さは頭部から中心部にかけて厚くなり、先端部に向けて再び薄くなる。先端部の切断面はやや粗いが、残りの面の整形は非常に丁寧である。また表面の中心部には、折れの際にできた横方向の割れが若干ある。形状的には先端部を尖らせていないものの、その内容から、城内に運ばれた物資の荷札に用いられたものと考えられる。この場合、物資名の数量のみ記されていて、その品名が特に記されていないことから、物資は米と考えるのが妥当である。本木簡は先述の搦手道の性格を具体的に表す史料といえよう。

なお釈読にあたっては、奈良国立文化財研究所の綾村宏・舘野和己・渡辺晃宏・山下信一郎の各氏に、ご教示いただいた。また写真撮影については、奈良国立文化財研究所の牛嶋茂氏にご協力いただいた。

9　関係文献

滋賀県教育委員会『特別史跡安土城跡発掘調査報告』一〇（二〇〇〇年）

（岩橋隆浩・松下　浩）